

## 近代沖縄の娯楽——明治・大正期における娯楽の一端——

鈴木 耕太

### はじめに

琉球王国は一八七九年の琉球処分により沖縄県となり、日本の一県としての歴史をスタートさせた。近代沖縄の幕開けである。これによって沖縄は日本の近代化の波に吞まれ、新聞が発行されたり、従来の手工芸品から機械化された製品が本土から入ってきたり、蓄音機や幻灯機、映写機などが持ち込まれるなど、少しずつ近代化へと歩みを進めていく。本稿では、近代沖縄における娯楽がどのようなものであったのかを、当時の新聞資料を中心に繙いてみようと思う。

この時代において一般的に「娯楽」というと、どのようなものがあげられるだろうか。すぐに想起されるのは沖縄芝居や舞踊・組踊に代表されるような芝居小屋を中心とした興行であろう。もちろん、芝居小屋が誕生する明治、大正期の娯楽の中心は沖縄芝居で、明治座・中座・沖縄座などの劇団に、玉城盛重・玉城盛義・新垣松舎・伊良波尹吉・渡嘉敷守良・守礼など名優達が鎬を削って日々の演目を発表していた。芝居小屋ではほぼ毎日興行がなされており、演目も週替わりで五、六番ある番組をすべて変更していた。また、切りの一番がヒットすると、その演目は数週間から数ヶ月にわたって上演された。

本稿では沖縄芝居などの常打ちの興行（所謂プロの興行）以外の当時の娯楽について事例をあげ、明治・大正期の沖縄での娯楽のありようを明らかにしようとするものである。本稿で「娯楽」と判断する規定として、定期、または臨時に開催された催事の「余興」として演じられたもの、または学校や地域自治会などで行われた余興を対象としたい。以下、『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球―近代編）』を中心として、娯楽の内容を個別に挙げていく。

## 角力（シマ・ウチナージマ）

沖繩の角力は、日本本土の相撲（以下「相撲」とする。記事にある角力・相撲の表記は沖繩角力とみて、引用以外は角力と表記する。）とは異なる。「相撲」は「仕切り」で拳を土俵に付けて後に「立合い」があり、相手と組み合ったり、技を仕掛けたりして勝敗を決める。足の裏以外が地面につくか、もしくは土俵から出たものが負けとなる。しかし、角力は最初から相手と四つに組んで勝負を始める。張り手・突っ張りなどの打撃による攻め手は無い。また、勝敗の決まり方も独特で、技をかけて、相手の背中（両肩）を地面に付けた方が勝ちとなる。「相撲」と異なり、土俵外に出たり、手が地面に付いたり、横倒しになっても勝つことにはならない。また、反則として試合の途中で手を外して相手の逆手を取ったり、襟を掴んだり、足を取って倒したり、手で相手の攻撃を防いだりなどがある。

格好は裸にまわしをつけるのではなく、現在では柔道着に似た衣裳に帯を締めて行われる。現在では「沖繩角力協会」が中心となって大会を開催・運営している。また、ルールも現在では直径七メートルの円、または四角の土俵を作って、その中で競われ、試合時間も一試合五分、勝敗は三本勝負となっている。

新聞から角力の記事を見ると、古いのは一八九九年二月一〇日の記事である。那覇の石門通りにある空き屋敷で、那覇の寄留人による「素人相撲」の興行が報じられる。興行は一〇日から三日間で、「其の筋の許可を得て」行われた。「其の筋」がどの機関なのか気になるところだが、紙面では明らかにされていない。この日は旧正月の三が日になっており、旧正月のイベントとして企画されたようだ。観客の飛び入り参加も許されており、三日間で売り上げが「九拾壹円」であったことまで報じられている。いくらの木戸賃で興行されたか分からないが、当時の芝居の木戸賃が大人四錢（小人は三錢。翌年に大人と同額となる）なので、同額と考えて単純に試算すると、期間中に二二〇人以上が楽しんだことになり、大変賑わったことが想像される。この興行は、利益の中から幾ばくかを「宮古島の火災有及伊平屋島、渡名喜島、島島等の難災民へ義捐」したことが報じられているので、現在のチャリティー公演に近い内容だったと考えられる。

また、チャリティーのような同様の催しは、一五年経た一九一四年にも行われていて興味深い。この年の八月、美里村字嘉手苅の石原某ほか三〇名が「中頭相撲団」を組織し、辻端道の沖繩座にて興行する事が報じられる。中頭の角力の名手達が那覇の芝居小屋で興行したのであった。八月九日の「琉球新報」に掲載されたその広告には「空前の主催／沖繩特技角力大会／八月九日より向フ一週間／午後七時三十分開会、飛込御望次第／但役員ノ都合謝絶ノ場合アリ／景品一等浴衣地一反二等シャツ一枚三等手拭一枚進呈／沖繩座ニ於テ」とあり、観客の中から対戦相手を飛び入りで募集し、さらに「中頭相撲団」に勝ったものには賞品まで授与される、という触れ込みであった。実際の興行の様子は、翌々日の八月一日付の「琉球新報」に報じられていて、「沖繩座の角力は昨日より開場したるが非常の人氣にて、一等席の外は殆ど満員の盛況にて、観客がすべて男子なるに特色を帯び、活気場内に充満たり」と賑わいを見せた。さらに、計画していた対戦相手の飛び入りもあり、飛び入りした観客が力士に勝つなど、「大喝采」であった様子が記されている。さらにこの「中頭相撲団」の盛況は次のような事例を産んでいる。

一九一四年九月五日に沖繩座で「首里相撲団」による「大相撲」が一週間行われ、期間中、暴風雨となったが大盛況であったことが報じられる。この興行は大人気で、一週間の公演の後にさらに一週間日延べして行われた。この事例から中頭だけでなく、首里でも角力は行われており、「相撲団」を結成し、興行を行える人数の力士がいたということがうかがえる。

当時、角力は人氣の余興であつたようだ。現在の「大相撲」のように常設の土俵があつて、興行的に行われているのではないが、何かの催し物があると必ずといって良いほど角力が行われる。美里村に絞つてその他の角力の事例を見ていこう。一九〇三年には「中頭郡甘蔗立毛審査会」の褒賞授与式の余興で角力が行われ、一九〇八年に美里村で行われた「牛馬奨励会」の余興でも角力が行われている。一九〇九年に美里村で行われた「中頭郡美里村重要物産品評会」の余興として行われた角力は、二〇組ほど取り組みが行われ、このときは六千人以上の観客があり、盛況であつたことが報じられている。また、この余興角力の最後の取り組みで、身の丈六尺の大男が登場し、飛び入りで対戦相手を募つて盛り上がった様子が記されている。

さらに角力は波之上祭での恒例の催しだった。一九〇四年五月一三日の波之上祭では余興として、「島尻中頭那覇首里の相撲」「島尻中頭の競馬」「剣舞」などが行われたことが報じられる。<sup>7</sup> 記事からは首里那覇近辺だけでなく、「島尻中頭」からも力士が参加していることがうかがえる。一九〇九年五月一七日、一八日の波之上祭でも角力と競馬が行われたことが報じられている。<sup>8</sup> 波之上祭の記事には必ずと言っていいほど角力・相撲の文字が見え、「奉納相撲」として行われたことが記された記事も見える。<sup>9</sup> また、一九二五年五月一日には、波之上祭の奉納相撲の出場者募集が報じられる。<sup>10</sup> これらの記事から、波之上祭の角力は、全県的に力士を募集して行われていたようだ。

他の地域ではどうだろうか。一九一四年から一九一六年はまとまって事例が見られるので時系列で挙げてみると、一九一四年九月二六日には北谷村青年会が余興として角力を行っている。<sup>11</sup> 一〇月八日、旧暦の八月一日の慣例として本部の瀬底で綱曳きが行われ、綱曳き後に内間毛で角力の取り組みが行われたと報じられる。<sup>12</sup> 一二月五日、東風平で行われた教育招集において余興として「蓄音機、福引、唐手、相撲」が行われる。<sup>13</sup> 一二月一〇日、真和志尋常高等小学校で真和志青年会の代議委員会が開かれ、余興として角力が行われる、と報じられる。<sup>14</sup>

一九一五年六月二七日、与那原の海水浴場開きの余興で爬龍船競漕や角力が行われたと報じられる。<sup>15</sup> 一〇月一五日に牧港青年会の「学事農事奨励並大曲記念道路落成式」の余興として、角力・唐手が演ぜられる。<sup>16</sup>

一九一六年六月四日、与那原で大角力大会が催される。<sup>17</sup> この時には国頭から有名力士もやってきて行われるほどの大会だった。

このように地域ごとに角力を行っており、与那原では遠く国頭から力士を呼んで角力を行っていたことが分かる。

そして、角力は即興で行われることもあったようだ。一九〇五年に行われた「旅順陥落祝勝会」で美里村では祝宴を開いた。このとき、美里村の石川・楚南・伊波・嘉手苺・山城・東恩納の地域が即興で角力勝負をして、石川が勝ったと報じられている。<sup>18</sup> さらに、美里村の中でも東西に分けて角力が行われたり、各字でも東西に別けて行われたりと、現在よりも角力は盛んに行われていたことがわかる。

明治・大正期の余興として、角力がよく余興で行われる行事は「原山勝負」である。原山勝負は「ハルスーブ」「ハ



ルヤマスーヴ」などと呼ばれ、農作物の出来高や、その品質、田畑の良否などを競う行事である。<sup>19</sup> 現在でも山芋勝負（ヤマムススーヴ）など、本島全域ではないが、その名残が地域によって行われている。戦前はこの原山勝負が春期と秋期の年二回行われた。そして原山勝負には必ず余興が行われ、美里村知花の弁当馬場などで角力大会が余興として開催されるなど、農作物の勝負とともに、地域の青年の力比べも行われていたようである。

それから、時代は下るが、一九三二（昭和七）年の新聞には、美里村の紹介の中で泡瀬自慢が語られ、そこでも「泡瀬角力で鳴らしただけに近代でも名力士を輩出している」と波上祭で優勝した石原昌永、石原昌直、石原昌定など県相撲の横綱を務めた力士の名が紹介されている。<sup>20</sup> 戦前の美里村は角力で名を馳せた地域であったのである。概観すると、爬龍船競漕が行われる時、泡瀬街道の開通式、教育勅語の奉読会の余興、泡瀬クラブの竣工記念など、主要な行事に角力大会が開かれており、現在より身近に角力があつたことがうかがえる。

ちなみに、本土の「相撲」は沖縄ではどうかであったか。一九一四年九月二六日、大阪の相撲が一〇月一〇日頃、来沖して興行することが報じられる。結局は一ヶ月ほど遅れて一月九日より興行が始まり、盛況に終わつたことが報じられる。<sup>21</sup> この事例では「大阪相撲」と報じられている。角力に対して「相撲」の記事はほとんど見られず、興行として行われたこの事例だけしか確認できなかった。

角力は明治・大正期において余興として県下で広く行われており、また、その余興が演じられる際には、競馬や綱曳きなどと一緒に行われるケースが多いことが記事からうかがえる。

## 馬勝負（シマスーヴ・シマハラセー）

馬勝負は競馬、シマハラセー、地域によっては馬揃い（シマズリー）とも言われる。本土の競馬とは事なり、馬の走る速さを競うのではなく、「脚組す」（アシクマシ）といって早足で馬の足並み、歩調の美しさ、姿の美しさを競うものである。その時は馬の脚は必ず一本は地に着いていなければならない。普通は直線コースでの競技で、スタートから競わせるのが正式なものであったが、後世になると、馬の歩調を整えるために数周馬場をめぐるせて、競う二

頭の歩調が揃ったら、「ディー」「トー」と、乗馬している者が互に声をかけて出発の合図とした。衣裳は乗馬の際に「馬乗袴」(シマヌイバカマ) という襦袢を着た。鞭は観音竹や布袋竹の地下茎で作ったといわれる。<sup>23</sup> 最近では二〇一三年に七〇年ぶりに沖縄市で復活した娯楽である。

明治期は様々な余興の場で馬勝負が登場する。古い事例は一九〇〇年に「秋期原勝負」の余興として行われ、同年開校した与勝尋常小学校の開校式の余興でも行われた。また、一九〇三年の美里間切の「春季原山勝負」においても余興として二五組の参加があったことが記されている。<sup>24</sup> その後は、一九〇四年の美里尋常小学校の落成式、同年の美里で行われた「遼陽占領大祝賀会」の余興でも馬勝負は行われた。<sup>25</sup>

美里間切の馬場では首里や那覇をはじめ、沖縄中から名馬が集まったといわれている。弁当馬場の広さは中頭一を誇り、とされ、この日には首里や那覇をはじめ、沖縄中から名馬が集まったといわれている。弁当馬場の広さは中頭一を誇り、長さはおよそ三町(約三二七メートル)、幅がおよそ三〇間(約五四メートル)あったと伝わっている。<sup>26</sup> 現在も残る今帰仁の仲原馬場(距離約二五〇メートル・幅約三〇メートル)<sup>27</sup> よりも広かったことが記述からみえる。このように広い場所でも多くの観客と馬が集まり、開催されていたのである。

明治の記録の中でいちばん参加した馬の数が多いのは、一九〇六年の「中頭郡重要物産品評会」の余興である。記事には「競馬は所謂弁当馬場に於て行はれ、之も中々盛にして、乗馬の数二〇〇の上にも出でたるやに見受けられたるも、当日は、踊の余興多き為め競馬を見るもの割合に少なかりき」とあり、知花の馬場、通称「弁当馬場」で行われた馬勝負の余興には二〇〇頭を超す参加があったが、残念なことに同日行われた踊りの余興の方に観客が集中し、馬勝負の観客は少なかつたようである。しかし、この記事からいえることは、当時の馬勝負の参加馬が多かったことが指摘でき、記事に取り上げられる以外でも、多くの場所で馬勝負が行われていたことが想像できる。

泡瀬の馬場においても競馬が行われている。一九一〇年九月八日に競馬会が開かれているが、記事には「常に淋き砂原の馬場も今日は打変り、周囲は見物人の垣」ができた、と盛況が報じられている。

先に挙げた以外にも馬勝負は盛んに行われており、前項の角力でも触れた波之上祭でも、馬勝負は角力と並び、恒

例の余興となっていたようである。その他には、一九〇九年六月に「府県制施行祝賀会」が開かれ、その余興として競馬、煙花、角力、芸者手踊りなどが演じられると報じられ、一九一一年八月に島尻青年会の親睦会が行われ、余興として軍談、蓄音機、角力、競馬が行われたことが報じられる。<sup>28</sup>このように波之上祭、原山勝負以外でも余興として行われた事例が多くある。角力とならび、当時の主要な娯楽の一つであったといえる。しかし、戦後は馬自体が農耕や交通機関として使われることがなくなり、それに伴って、馬勝負も行われなくなったと思われる。実際に、戦後の新聞では競馬が行われたことを報じる記事がほとんど見られない。現在は文化を復興させる取り組みとして「シマハラセー」をイベントとして行っているが、継続して行われることを期待したい。

## 空手

空手は戦前まで「手（ティー）」や「唐手（トウーディー）」といった。元々は士族の家に代々伝わる武術で、門外不出の武道であった。その家の長子が家の手を伝授され、次男、三男はそれを見ることすらはばかられる、というほど、家の武術として伝承されていたのである。

いつ頃から空手が沖縄で行われてきたのか、誰が創始したのかなどは多くの説があり、未だ明らかになっていないが、空手の型の名前「バツサイ」「クーサンクー」「スパーリンペイ」などからもわかるように、中国語的読みが多いことから、中国（主に福建などの中国南部）から伝わった武術と、沖縄古来の武術との融合から、現在のような形になったと推測される。

空手の流派は大きく分けると首里手（シュイディー）、泊手（トウマイディー）と称される小林流系（松林・少林なども含む）、那覇手（ナハディー）と称される剛柔流系、上地流系の三つが代表的である。それぞれに独自の型があり、特徴的である。流派を超えて全く同じ型はないが、基本とされる立ち方、脚の捌き方、攻撃、防御の身のこなし方などは共通している。それ以外に本部御殿手（本部流）や劉衛流などもある。現在はそれぞれの流派がさらに枝分かれをしており、道場によつては本土や海外に支部を持つ大きな組織となっているところもある。

先に述べたように、空手はその発祥について詳らかな文献はまだ発見されていない。しかし、琉球王朝時代から脈々と受け継がれていることは事実であり、その名手の逸話も多く残されている。武士本部、東恩納寛量、松茂良興作、松村宗棍などは王朝時代末期の空手の達人であり、もちろんそれ以前にも空手の達人はいた。この空手が一般民衆の前で演舞されるようになるきっかけとなるのは、明治期の軍事化の流れが絡んでいる。つまり、空手の鍛錬で鍛えられた沖縄の青年が着目され、軍人を鍛えるための兵式体操と並んで空手が学校教育の中でも教授されていたのである。<sup>30</sup>一例を挙げると、一九〇一年には首里尋常小学校に体操科の一部として「唐手」が課され、同じ年、第一中学校・師範学校に正科として「空手」が採用されている。また、県立第一中学校や師範学校では糸洲安恒や花城長茂・屋部憲通などが指導にあたったと言われている。屋部憲通は「屋部軍曹」と当時あだ名されており、彼の日露戦争での活躍は沖縄県民の中に知らない者はいないというほど有名であった。屋部は日露戦争後、沖縄県師範学校の体育及び兵式教官として就任し、生徒達に兵式や空手を指導したのである。

以上のような流れから、学校教育の中に入ってきた空手は、一般に普及し、様々な場所で披露されることとなる。では実際にどのような場面で披露されたのであろうか。一九〇八年八月一六日には、那覇高等学校の同窓会として撃剣・剣舞・唐手・柔道・詩吟・信号体操などが行われる。<sup>31</sup>これを企画したのは同窓会の協議会で、岸本賀昌、伊波普猷などがその協議会に加わっている。この年は様々なところで空手が披露されているのが記事にみえ、九月二日には首里山川区の親睦会が開かれ、余興では剣舞・唐手・詩吟が行われると報じられ、一〇月一〇日、東風平では「各字夜学員大会」なるものが開かれ、そこでは綱曳き、唐手、軍人による銃操法、剣舞などが催された。<sup>33</sup>一二月二四日には首里尋常高等小学校の第二回学芸会が開かれ、唱歌・独唱・唐手・剣舞・手品・曾我兄弟時計対話などが披露される。<sup>34</sup>

一九〇九年九月二四日には、旧彼岸として、首里宇町端で唐手、棒踊りと混交で獅子舞が演じられた。<sup>35</sup>この時は尚家で午後四時頃演じ、その後下市場の仮設舞台で演じられ、なかなかの盛況であったと報じている。また、同年、美里村西原で「学事農事奨励会」が開かれ、余興で中学生の撃剣、柔道、唐手が披露されている。<sup>36</sup>学事奨励会とは、地

域で子ども達の学業向上を図るため、教育品を視察したり、子ども達の学芸を地域の大人達が観覧し、文具や教育品を授与するものである。現在では地域の行事として自治会単位や門中・親戚単位で開かれている。いずれも子どもや地域の芸能などが披露され、子ども達に文具などが与えられている。

一九一〇年九月一日の「琉球新報」には、越來村で青年会が開かれ、講話並びに「唐手一五組」「ハモニカ吹奏」などが演じられたと報じられている。<sup>37</sup>

一九一一年四月二九日に行われた尚昌の留学送別会において、余興として「首里人の相撲、国頭郡羽地の獅子舞、中座の楽隊、蓄音機、風船、煙火」などが演じられ、見物人が多くやつてきた、と報じられている。<sup>38</sup>しかし、送別会の記事には相撲が演ぜられたことは報じられず、筑前琵琶や謡曲、滑稽手品とともに「仲本政春氏の唐手、大工廻翁の三弦」<sup>39</sup>などが演ぜられたとある。そして八月には与勝では音楽講習会が開かれ、余興として中等学校在学中の生徒による唐手と角力が行われた。<sup>40</sup>

一九一四年七月二八日の「琉球新報」では、越來尋常小学校の学芸会で唱歌・唐手などが演じられている。<sup>41</sup>

一九一五年一〇月一七日に行われた南山神社の遷座式の余興で与座の学生唐手、角力、ウスデークが余興として供されたと報じられる。<sup>42</sup>また、このときの唐手は「唐手踊」と報じられる。

一九一六年一月六日、北谷村の「立太子礼奉祝」で青年団の余興として唐手が演ぜられると報じられる。<sup>43</sup>

ここで挙げた事例の中、尚昌の送別会で空手を披露している仲本政春は、一九〇六年に『歩兵偵探哨兵教練』という本を東京で著しており、軍人であったことがわかる。県立一中の同窓会報（一九二三年発行）には一九〇一年卒業生の名前の中に「仲本政春（歩兵中尉 那覇市議）」とあるので、この頃は那覇市議をしていたことが想像できる。詳細はこれ以上つかめないが、尚昌の前で空手を使い、新聞に報じられているのでかなりの腕前だったことが想像できる。

空手が余興として演ぜられた時は、角力や「剣舞」と一緒に行われている事例が目立つ。「剣舞」そのものがどのようなものであるか新聞記事などからはわからないが、一般的に日清・日露戦争の頃に本土で流行した詩吟に合わせ

て舞うものか、それ以降流行した、三味線や鉦、太鼓入りで演ずる「改良剣舞」のいずれかであろう。しかし、どちらにせよ大和の芸能であったことは言えるだろう。

空手が余興として演ぜられた場で特徴的なのは、「学事奨励会」や「学芸会」が多い、ということである。これは、楽しむための娯楽という側面がある一方、学校教育に空手が組み込まれていく流れに見えるように、「剣舞」同様、戦意高揚の風潮があったからかもしれない。いちいち余興の意味を記した記事がないので断定ができないが、時代やその他の武術系の芸能と一緒に供されている点からも蓋然性が高からう。

## 綱引き

綱引きは、その年の豊作に感謝し、来年の豊作を祈願する行事である。そして、その勝負によって豊穰や吉凶を占うことも行われる。一本の綱を引くのではなく、雄綱と雌綱の二本の綱をカヌチ棒（門棒）で留め、一本にした綱を引くのである。二本の綱を結ぶことにも意味があり、東西に別れて引かれる綱のどちらが勝つと豊作になる、と言うような意味づけをするのであるが、その内容は地域によつて様々である。沖縄本島では旧暦の六月二五日に引かれることが一般的であるが、現在の祭りではその時期からはずれて行われることもある（那覇大綱引きまつりなど）。宮古地方や八重山地方でも豊年祭にあわせて綱引きが行われる地域がある。本項では、旧暦の六月二五日の年中行事（カシチー）とは異なる時期、日程に行われている綱引きについて言及する。

余興としての綱引きが新聞に見られるのは、前項の空手にも挙げた一九〇八年一〇月一〇日、東風平で行われた「各字夜学員大会」である。そこでは綱曳き、唐手、軍人による銃操法、剣舞などが催された。<sup>44</sup>それから一九一〇年五月一二日には波之上祭の余興が決定し、綱曳きが決定となる、と報じられる。<sup>45</sup>一九一二年には、美里小学校で卒業生を集めて行われた勅語奉読、勅書奉読の催しで余興として綱引きが行われ、さらに一九一六年には「御大典奉祝」の余興として綱引きが行われていることが報じられる。

これらの事例では、綱引きが年中行事というものから離れ、娯楽の一つとして行われていることがうかがえる。こ

それは現在でも沖縄市の「沖縄国際カーニバル」や「那覇大綱引きまつり」などと同じように、イベントの目玉として行われるケースと同様であるといえる。「沖縄国際カーニバル」は、沖縄市民の融和と産業の活性化を図り、国際色豊かな市の特性を発信する趣旨で、音楽や芸能・スポーツ等の交流を通して「国際文化観光都市」の街づくりイベントである。その中でも、「国際大綱引き」では、重さ約一〇トン、長さ約八〇メートルの綱が使われ、約二〇〇〇人の参加者が東西に分かれて引き合う。

さらに「那覇大綱引きまつり」は元々が年中行事であったが、現在ではギネスに登録されるような世界一のスケールの綱を引くという、綱を引く行為が注目されるだけでなく、綱そのものにも「めずらしさ」を強調し、娯楽・観光的な要素が強くなっていると言える。

## エイサー

前項の綱引きと同じように、年中行事に行われている芸能が、余興として演じられる例を挙げる。エイサーは旧暦の七月一日～一五日にかけて行われる年中行事で、旧盆に行われる芸能の一つである。祖先の霊を慰めるため、共同体の戸々をめぐってエイサーを奉納するのである。青年男女は三線にあわせて太太鼓・締太鼓・パーランクーや手踊りで踊る。踊りや採物は地域によって異なるが、その時に必ず歌われるのは「継親念仏」などの歌である。その後「スーリ東」「久高万寿主」「 Dank 節」などが歌われる。

現在では民謡や新民謡、沖縄ポップスなど、様々な曲を取り入れて踊る地域もあり、エイサー自体が新たな芸能の一ジャンルを形成しているといっても過言ではない。もともとエイサーを踊る習慣がない地域にも青年会が主体となつてエイサーを取り入れ、伝統として受け継ぐところもある。また、芸能としてのエイサーは、「琉球國祭り太鼓」に代表される「創作エイサー」というジャンルとして、沖縄だけでなく、日本本土や世界各地に伝播し、今なお広がりを見せている。毎年九月ないし一〇月に「世界エイサー大会」なども開催されるようになり、その人氣は衰えることを知らない。

戦前の新聞資料からエイサーが行われた様子を見ていくと、一九〇六年一〇月に美里尋常小学校で行われた「中頭郡重要物産品評会」において、知花と西原のエイサー、翌年の一九〇七年九月に行われた「越来間切展覧会」では越来のエイサーが行われ、盛況を博した様子が出てくる。特に一九〇七年の時は観客も五〇〇人以上集まったとされ、その様子は「首里・那覇の営業芝居も及ばん所があります」と新聞記事に掲載されるほどであった。この事例にみえる評価からは、当時、首里や那覇で行われていた商業芝居よりも見応えがある、ということが読み取れる。そして、演じられた時期も旧暦七月の時期と異なることから、見世物としてのエイサーが、この時期から行われていたことは注目すべきであり、現在のエイサーの隆盛にもつながるような事例である。

つぎに、知花のエイサーの様子が一九〇七年の新聞に掲載されているので見てみよう。記事には「知花の里にても一七日より二一日まで五日の間、此の踊賑なりき。狂せるが如き青年青女、水蒸気の多き南島の澄み渡れる月の下に円陣を作り、歩調を合せ、エイサア歌を斉唱して夜の明るくも知らで踊るさまは大古純朴の風あり」とあり、沖縄市知花では、一七日より二一日までの五日間、青年男女がエイサー歌を斉唱しながら夜が明けるまで踊ったことが記されている。記事に出ている「一七日より二一日まで」というのがはたして何月なのか特定できないが、掲載されているのが九月一七日であるのでそれ以前のことと思われる。

記事の日付が不明なため、掲載年の八月一七日からと仮定すると、旧暦七月九日から一三日までとなり、掲載日の九月一七日からと仮定すると旧暦八月一〇日から一四日までとなる。新暦八月とすると旧暦七月の旧盆前に終わることになり、新暦九月とするとウークイを過ぎてからのエイサーとなる。いずれにしてもエイサーが通常行われる七月の一三日から一五日の期間にほぼ重ならないのである。しかし、五日間もかけてエイサーを行っているということは、この時に部落内のすべての民家を一軒ずつ訪ね、エイサーを披露していたからであろうか。時期は未定だが、ともかく、現代よりも長い期間、エイサーを行っているのがわかる事例である。

また、この年の「越来間切重要物産品評会」においては、閉会式後の余興として呉屋村と越来村のエイサーが行われ、余興として一つの字だけでなく、数力所のエイサーが披露されていることがうかがえる。



その次に余興としてエイサーが演じられたのは、一九一一年に行われた「中頭郡重要物産品評会・教育品展覧会」である。ここでは「越来村の七月ヤイシャー」と紹介されている。このときは詳しい情報がこれ以外見られないため詳しくわからないが、明治の三〇年代後半から「重要物産品評会」「教育展覧会」などの余興には、必ずといって良いほどエイサーが披露されており、当時からエイサーが年中行事の芸能だけではなく「観る芸能」として演じられていたことがわかる。

余談であるが、一九六二年一月一八日の「琉球新報」には、コザ市観光協会がエイサーをプロ化・組織化して観光客に提供しようと提言される。そして実際にエイサーの踊り手を募集するが、その後の情報は挙がって来ないので立ち消えの企画となったか。現在掲げる「エイサーのまち」としての企画が五〇年以上も前に行われていたのである。

## 爬龍船競漕（ハーリー）

爬龍船競漕は、糸満やその他の漁村で年中行事の旧暦五月四日のユッカヌヒーによく行われる。その由来は『琉球国由来記』の中に「当国ニ爬龍舟漕初年代、不<sub>不</sub>考知<sub>其</sub>」。俗諺曰。長浜大夫ト云人<sub>不</sub>伝<sub>其</sub>。南京ノ爬龍舟ニ倣テ造ケルトナリ。故ニ五月三日ニハ彼人ノ為メニトテ、西ノ海ニテ漕トナリ。」と記されており、いつ頃から爬龍船を漕ぐことになったのかは伝わっておらず、舟は南京に倣って作ったことが記されている。しかし、ハーリー行事は航海の安全や豊漁を祈願する御願（ウガン）を主旨とした神事である。このことは沖縄各地のハーリー行事が神事と関わっている事を見ればわかることである。だが、近年では新暦の五月四日の「国民の祝日」に行う地方や、旧暦五月四日の近くに当たる日曜日や祝祭日などにずらして催し、観光化する地域もある。

戦前の泡瀬における爬龍船競漕をみると、ユッカヌヒーに行われるそれとは趣旨が異なるようである。どちらかというと、娯楽性が強かった様に記事には描かれている。戦前の新聞記事によると、開催されるのは新暦九月に行われることが多いことが確認できる。一九一〇年の「琉球新報」の記事を見ると、行われたのは旧八月一五日であり、「例年ならば青年男女打揃って湖屋馬場に出る習慣」であった旧の八月一五日に、馬場ではなく浜に出て爬龍船大会が挙

行されたのである。競漕では泡瀬を東・中・西の三組に分けて選抜された青年が赤・白・紫の手拭を頭に締めて漕ぎ手となった。観客は中城、越来、美里、勝連から押し寄せ、人山を築いた。その人数は数万といわれる。また、陸からの観客以外に、十数艘の伝馬船に見物人を乗せた船も居り、多くの観客で賑わっていた。

この記事を寄せた「失名氏」は、例年の慣習よりも「自分の字内に於て此催しをしたのは誠に良い事で我輩賛辞を呈して惜まぬ」と爬龍船大会を絶賛している。また、当日は多くの観客が押し寄せたので、床屋・料理屋・てんぷら屋・そば屋は大繁盛であつたそうだ。記事には「殊に料理屋などは辻嶋新下りの新かぼちやも沢山居るものですから、七件とも満員で門前払ひを喰はれたのも多数ある様でした」と、泡瀬にあつた七件の料理屋（サカナヤ）の盛況についても触れている。

泡瀬でどのような経緯があつて旧の八月十五夜に爬龍船競漕を行ったかは不詳であるが、このとき初めて旧暦の八月一五日に行われた爬龍船競漕は、その後も続いたのであろうか。しばらく新聞には取り上げられておらず、次に確認できるのは一九一三年の「中頭郡畜産品評会」の余興として行われている記事に見えるだけである。このときも行われたのは旧暦八月一五日である。その次は一九一五年と、一九一六年に確認できる。一九一五年は記事の中で「三年ぶり<sup>46</sup>」とあるので、一九一三年の余興の爬龍船競漕は泡瀬で行ったものと認識していないのか、それとも「二年ぶり」の間違いなのか不明であるが、いずれも旧暦の八月一五日の観月会に行われていることから、一九一〇年から泡瀬における爬龍船競漕は観月会において行われるものであつたといえる。

一九〇九年八月一日には名護の川田で爬龍船競漕が行われた。<sup>47</sup> 記者の意見として、農村では「エイサー及び手踊りの如き柔弱なる遊樂を捨て、綱曳、相撲、唐手、爬龍船競漕」などの演技をして欲しい、と述べており、日清戦争からつづく、戦時下の世相を表しているように感じる。

## ウスデーク

ウスデークは、五穀豊穡や感謝、村落共同体の繁栄などを願って行われる奉納舞踊である。踊るのは女性だけで、

沖縄本島全域および周辺離島に分布している芸能である。音取り（ニートゥイ）と呼ばれる年長者の女性を先頭に遊び庭に入場し、円陣を作って左回りに輪を描きながら踊られる。主に旧暦八月一日、もしくは九月一六日付近に行われることが多い。

現在でも沖縄市知花のウスデークはその様子が新聞に取り上げられている。最近では衣装のワタジンとドゥージンとして使っている知花花織が二〇一二年に国指定の伝統工芸品に指定され、注目を集めた。現在の知花のウスデークは、臼太鼓を叩きながら唄と舞踊が前半・後半六曲ずつの合計一二曲を伝承している。

明治・大正期の余興として登場するウスデークの古い記録は、一九〇六年の「中頭郡重要物産品評会」において演じられていたものである。記事には「筆者注…ウスデークは（美里間切知花村の一隊にして、紅の紗を纏ひ其数稍や少けれども、歌舞の面白きは更に前（筆者注…直前に演じている具志川のウシデーク）に異ならず声曲碧大天に入つて雲行為め（欠字）止まるの思あらしむ。此一隊も亦舞扇を風に翻して乱舞踊躍しつゝ去りぬ」とあり、人数は具志川のウスデークに比べ少ないものの、紅の紗を纏った美しい姿と、歌舞の面白さを評価されている。記事の中で面白なのは「舞扇を風に翻して乱舞踊躍しつゝ去りぬ」という一文で、扇子を翻しながら退場している様子が語られている。また、一九〇七年の「越来間切重要物産品評会」においては、閉会式後の余興として宇久田と大工廻のウスデークが行われ、「幾多観衆の喝采を博したり」と評されている。ウスデークの上演が確認できる戦前の資料は少ないが、いずれも沖縄市を中心とした地域が余興の際には出演しており、その人気が高かったことがうかがえる。

### 棒踊り・スーマチ棒

棒踊りは青年二人一組、三人一組、四人一組、五人一組になって、三尺・六尺の棒を持ち、約束ごとが決められた組手を行う芸能である。地域によつては棒対鎗、鎌、大きな刀、サイなど、採物を変えて行つところもある。沖縄本島だけでなく、宮古、八重山地方まである芸能である。このような芸能は古くからあり、一八三八年の尚育王の冊封に供された演目が確認できる『校注 琉球戯曲集』の中にも、「唐棒」という演目が上演されている。「唐棒」は六人

の出演者が記されているが、おそらく数名が一組になって演じていたと思われる。

明治・大正期の新聞に登場するのは「呉屋村」の棒踊りである。一九〇六（明治三九）年の新聞によれば「中頭郡重要物産品評会」において演じられた余興の中に「越来間切呉屋村の棒躍」とあり、四〇〇〇人もの観客の前で披露されたとある。その様子は以下のものであった。

越来間切呉屋村の棒躍は、越来間切呉屋村の学校構外、野原に幔幕を張り、中に太鼓や鉦などを敲くものありて、絶えず景気を付け大凡、六七十人許りの若者ども皆一本宛の棒を持ちて、躍り廻はることなるが、其服装は、短き白衣を着けた上に赤き打ち掛けを着し、甲立を着けた頭巾を被ぶり、二列になりて行き違ひに馳せ廻はりて、棒を打ち合せたり又は一組づゝ現はれて棒の試合を為すなど極めて面白し。躍は少しく単純に失すれども、服装の小サツパリとして一定したるに、其演技田舎に希な程、上品なるとに依りて、一段観衆の目を聳動せしめたり

記事からは六、七〇人の若者達によるスーマチや組棒が行われた様子が伺え、その衣裳が現在のように白の上着の上からウツチャキを着たようなスタイルであることもわかる。なによりもこの筆者は衣裳を褒めており、演技は「田舎に希な程、上品」であると絶賛している。この記事には衣裳や踊っている状況が詳しく書かれており、当時の棒踊りの状況を伝える貴重なものである。

別の地域で行われたものは、一九〇九年六月一日、今帰仁にある兼次小学校の落成式で、今泊の棒踊りが供されたことが報じられる。<sup>48</sup>

それから、新聞記事には地域名は出ていないが、一九一一年の「中頭郡重要物産品評会・教育品展覧会」や大正五年の「中頭郡畜産品評会」、一九一七年の「中頭郡品評会」の余興において棒踊りが演じられている。おそらく近隣の美里や山内などの棒踊りがこのような場で披露されたことであろう。

沖縄市においては近年、二〇〇六年八月に「美里復興六〇周年記念」の一環でスーマチが演じられた。ここでは、

美里地域の一〇代から六〇代以上の男性約二〇〇人が参加し、各自が棒を持ち、渦巻くように円陣をつくりスーマチを行った後、棒術などを披露した。美里復興六〇周年記念事業実行委員会によると、美里のスーマチは一九一三年に始まったと言われ、大きな節目の年に上演されてきた。二〇〇六年以前には一九二八年、一九八四年、一九九一年に行われた。先に挙げた記事では一九〇六年には隣間切の呉屋村の棒踊りが上演されているので、呉屋や近くの村から伝わったものか。

一九一三年の「中頭郡畜産品評会」の余興では、西原の棒踊りと芝居（地域や詳細不明）、泡瀬の爬龍船が演じられた事が報じられている。ここに出てくる西原の棒踊りは、現在の美里の棒踊りのことであろうか。これ以前の記録では西原の棒踊りの記事は見られない。

美里のスーマチは六尺棒を持った男性たちが、ホラ貝の音に合わせ、「ユイツ、ユイツ、」と掛け声をかけながら二隊に分かれて進み、小巻を作った後、大巻へと隊列を変えていく流れで演じられる。

## 運動会

運動会というと、現在では学校行事として行うことを想像するであろう。しかし、近代の沖縄において、運動会もまた、娯楽の一つであったと考えることができる事例がある。もちろん、学校行事の中で生まれたのがその始めであるが、美里村を例に挙げると、校区であった池原、登川、知花、西原、宮里、松本（松宮）の六部落の対抗競技が主であり、対抗戦で勝利すると、子どもから、応援に来ていた大人まで喜んだという。運動会の日、家族全員で出かけて応援をしたのである。

では、明治・大正期の運動会はどうなものであったか。一九〇〇年の記録が確認できる中では最も古い。この年には「中頭紀年運動会」が行われた。中頭地区の尋常小学校の合同運動会で、会場は泡瀬の塩浜にて行われた。参加生徒数は六四〇五人であり、観覧に来ていた父兄の数は四九九四人と記事は報じている。このほか一般観客を加算すれば二〇〇〇人余の盛況であった。詳しく見ていくと、運動会に参加した学校は、浦添・宜野湾・北谷・読谷山・

美里・伊保・具志川・与勝・宮城・浜・中城・津波・西原の一三校で、種目は矯正術、徒手体操、鉦鈴体操、柔軟体操、球竿体操、中隊運動、円陣軍歌、旗取競走（距離八〇メートルと一二〇メートルの二種目）、二人三脚、目明擬馬競争、提灯競争（距離一五〇メートル）、盲目擬馬競争（距離一〇〇メートル）の一三種目であった。競争の中の旗取競争や二人三脚は現在でも想像できる種目であるが、擬馬競争は現在の騎馬の事であろうか。騎馬競争であったとすれば「目明擬馬競争」は馬役も、それに乗る者も目隠しなしで競走し、「盲目擬馬競走」は馬役が目隠しをして、乗る者の指示で方向を決めながら走る、といった趣向のものであろうか。残念ながら、記事には競技種目を解説していないため不明であるが、競技種目名だけを見ても興味深い。

運動会の開始は午前一〇時で、閉会は午後四時半であった。午前中は体操競技で、昼食を食べて後からは円陣軍歌以降の競争競技であった。競技はすべて学年順に行われ、午前中の体操は、各校、各学年の一糸乱れぬ姿を見て、父兄や観客らは喜んだ。今でいうところのマスゲームに近い。午後の競技は、文字通り「競争」であり、各学校の対校戦であった。どの学校がどの種目に勝利したかは記載されていないが、賞状等を授与されて散会したとある。当日の塩浜は「立錫の余地なき」ほどの人だかりだったようである。

次に、余興として運動会が催されている例を挙げる。一九〇八年は越來村の養老会の余興で、越來尋常小学校の生徒たちの運動会が披露された。<sup>49</sup>そして一九〇九年には越來村の原山勝負で、余興として越來尋常小学校の運動会が行われた。<sup>50</sup>いずれも学校行事としてではなく、別の行事の余興として行われている。同様の事例は一九三九年の美里村の秋季原山勝負でも見られ、このときの余興として男女青年団同学童連合の運動会が行われている。この三つの事例は尋常小学校や男女青年学童連合など、一つの組織の中での運動会であるため、先に述べたような、部落対校の運動会であったと考えられる。

美里では運動会は競技本位で、一般児童生徒の参加する種目は、開会式・閉会式・ラジオ体操くらいで、最初から最後まで競技種目でプログラムは埋め尽くされ、応援団も部落の順位に血眼になって参加していたという。<sup>51</sup>そして、選手に選ばれると、鼻高々で、練習にも力を入れた。選手に選ばれた青年達は運動会の一ヶ月前から合宿を行い、普

段は口にするものの少ない、ご馳走である山羊や鶏、缶詰を食べ、白米もふんだんに食べて栄養をつけて運動会に臨んだという。そして運動会が終わると、優勝した部落では区長や長老が酒を準備して待っていて、勝利した選手達を囲んで夜遅くまで御祝いに花を咲かせたそうである。だが、このような運動会は戦後の昭和二三年頃まで続いたが、それ以降は姿を消し、現在見るような学校教育、学校行事の運動会になったという。

## 幻燈会

幻灯会とは、幻灯機を用いて行うスライドを観覧する会である。幻灯機とは、スライド映写機の原型にあたる機械、あるいはその後身であるスライド映写機のことである。絵・写真・物体に光を当て、それを凹面鏡や凸レンズなどで拡大して、スクリーン上にて映し出す装置である。沖縄でも明治の末ごろから登場する。「衛生幻灯会」や「教育幻灯会」などがよく行われており、主に尋常小学校やお寺などで人を集めて上映していた。もちろん、スライドショーなので音楽は出ない。幻灯で写真や物を映し出しながら、講話や解説を行う、といったものであった。具体的にどのような幻灯会が行われていたのか見てみよう。

一八九八年七月八日には真教寺で「衛生幻灯会」が行われ、「男女老若六百有余名」が集まり、「会場立錫余地」ない盛況ぶりだったことが報じられている。<sup>52</sup>このような幻灯会は同年七月・八月・九月・一〇月と行われたことが新聞に掲載され、沖縄私立衛生会や日本赤十字社の主催で、会場は学校や映画館（南陽館）、真教寺などであった。日本赤十字社の上演対象は、社員とその家族であったのに対し、沖縄私立衛生会は無料で上映したことが新聞に報じられており、そのためか、いずれも多くの人々がこの幻灯を見たようである。<sup>53</sup>

幻灯会は布教活動に用いられたと思われる事例もみられ、娯楽を使うことで不特定多数の参加者を集める手段のひとつとして用いていることが記事からみてとれる。

一九〇二年一月二三日には、北谷尋常小学校の職員の発案で、学事奨励の幻灯会が行われ、約九百人の観客が集まり「頗る盛況」であったことが報じられる。<sup>55</sup>

一九〇三年六月一三日には那覇高等小学校で海軍関係の幻灯会が行われる。ここでは漢那憲和による説明などもあり、「観覧者の喝采を博し」たことが報じられている。<sup>56</sup>

赤十字の幻灯会は、一九〇四年には那覇市内、島尻郡の各小学校で開催され、島尻郡では観客の多いときは約一六〇〇人、少ないときでも約八〇〇人が鑑賞した、と報じられている。<sup>57</sup>

一九〇七年七月一日には屋部尋常小学校で教育幻灯会が五回にわたって行われる。<sup>58</sup> 国頭でも盛況を呈したようである。

一九〇八年の「琉球新報」には、伊波尋常小学校で、仲西尋常小学校の幻灯機を借りて、学校区内をめぐって幻灯会を行ったところ、大変盛況であったと報じられている。当時は幻灯機そのものが珍しく、持っている学校も少なかった。幻灯機を持っている学校から借りてきて上映する、ということがたびたび行われていた。この事例でも、伊波尋常小学校には幻灯機がなかった。ので、わざわざ浦添間切の仲西尋常小学校から幻灯機を借りてきて上映していることがうかがえる。

一九一〇年の「琉球新報」には、越来と上地で学事奨励会が催され、その中で幻灯会が行われ、父兄母姉にも感動を与えたことが記事に掲載されている。この事例では、おそらく、幻灯機を越来と上地で使い回したのではないかと思われる。そして父兄母姉たちも幻灯機のスライドショーを見て感動していた様子から、あまりこの地域では幻灯機による上映は行われておらず、特別な催しであったことが考えられる。

一九一六年一月一日の「琉球新報」には、ブルが幻灯機を使ってキリスト教の宣教と禁酒に関する幻灯を、読谷山、古堅、久場、泡瀬、与那原、一中、高等女学校、那覇小学校で行い、中でも泡瀬は二〇〇名の見物が出て大盛況であったと報じられている。

ブル (The Rev. Earl Rankin Bull) という人物は、一八七六年にアメリカで生まれ、一九一一年に九州・沖縄地区へ派遣され、一五年間日本で伝道をした宣教師である。沖縄ではキリスト教の布教のほかに、中学で英語を教え、先に来沖していたベッテルハイムの記念碑を大正一五年に建立するなど、様々な活動をしている人物である。また、



沖繩の資料を積極的に蒐集し、現在、琉球大学附属図書館に所蔵されている。この記事では沖繩各地をめぐる本職のキリスト教の宣教活動と一緒に、幻灯機を使つて禁酒に関する講話を行っていることが述べられているが、泡瀬の盛況ぶりだけがクローズアップして記されている。プールの宣教活動に多くの人物が集まった、というよりは、幻灯を楽しむために多くの人が集まったと考えることもできそうである。

次に、少しだけ活動写真にも触れる。活動写真は映画の旧称であり、映写機は一八九二年にエジソンによつて発明されている。日本へ入ってくるのは一八九七年ごろであった。沖繩で活動写真が上演されたのは一九〇二年ごろである。その頃の様子が「琉球新報」に掲載されているので見てみよう。

広告にもある如く来る二十七日より辻、上の芝居に於て、一昨年の北清事件、及び米西戦争の実況活動写真にて活現せしめ、(中略)活動写真は普通ありふれた幻灯とは違い、実物の如く写真を活動せしめ、観る人をして実物へ接するの感あらしめるものなれば、(中略)北清一事件の如きまたは米西戦争の如き、近代歴史に著名なる出来事の実況をば、活動写真を以て公衆に觀せしむるは、教育上有益にして生はも勿論一般の人人に於ても見物の価値あるべし。

この記事に見られるように、活動写真は先に挙げた幻灯よりも、観客がよりリアルに対象と接することのできる物として紹介されており、特に教育においても有益であるだけでなく、一般の人々においても見る価値のあるものであると推奨している。もちろん、この時期は無声の動画であったが、人々は目の前で繰り広げられる動画に、好奇のまなざしを向け、喜んで鑑賞していたのである。

初期の活動写真の上映を見てみると、一九一二年に越來尋常小学校で、沖繩教育会から借用した活動写真を使つて、通俗講話会が開かれたことが掲載されている。その時は父兄や一般客など「幾千人」の観客が詰めかけ、大成功に終わった、と記されている。先に挙げた「上の芝居」での上映から一〇年ほど時が経っているが、活動写真の上映に多くの

観客が詰めかけている様子から、大正に入ってもなお、活動写真の人気ぶりがうかがえる。

活動写真で上映されるフィルムの劇名は、実写（ニュース、実況、風景など）、それに滑稽（喜劇）・新派（現代劇）・活劇（洋画）・旧劇（時代劇）などのジャンルがあった。当時は今のように昼興行はなく、夕方から興行をしていた。上演前には音楽をかけたり、町まわりの宣伝隊も登場した。作品は週一回新作が公開されており、現在の映画の常識から考えると、かなり速いペースで新作上映を行っている。活動写真が普及し始めると、沖縄芝居を超えるほどの人気を得る動きも見られる。そのような中で、沖縄芝居役者達は、活動写真と芝居の融合を考えるのである。「連鎖劇」がそれである。もともとは一九〇八年九月に、東京・宮戸座で四世沢村源之助主演の「女さむらひ」がその最初とされる。芝居のなかに活動写真（無声映画）をいく場面も交互に採り入れ、連続して上演した。映画場面は舞台にスクリーンをおろし、同じ俳優が裏で台詞を言つて、映像と舞台を一連の流れのように見せたのである。しかし、本土では一九一七年の「興行法改正」により連鎖劇の上演は中止となる。沖縄芝居でも連鎖劇は本土に遅れて一九一六年に初めて上演している。本土の時代劇を上演し、チャンバラなど盛り上がる場面を実際の劇として上演した。最初は観客からの人気もそれなりにあったが、次第に本土のフィルムでの上演は不評になっていく。というのも、フィルムに映し出される役者の衣裳と、劇で登場する役者の衣裳が違つたため、観客の気分が萎えてしまつて作品に集中できない、という理由が多かつた。そこで今度は沖縄芝居の一座が、首里城附近の映像を連鎖劇に使つた。それは一九二〇年代に入ると盛んになり、複数の劇団が沖縄の背景として連鎖劇を撮つて舞台で使用するのである。

そして一九三〇年代には、那覇でロケした現代劇「執念の毒蛇」と中城城でロケした時代劇「護佐丸誠忠録」という、二本の本格的な無声映画が作られる。沖縄で本格的に無声映画が製作されるのである。現在、上記の二本以外に映画が現存していないのであるが、おそらくこれ以外にも製作されたと考えられる。これ以降、映画が娯楽の中心を担っていくようになり、沖縄芝居はその他の娯楽と均衡しながら、歴史を歩んでいくことになるのである。

## 小括

以上、明治・大正期の娯楽について、私見を加えつつピックアップした。本稿で明らかになったことは、常打ちの芝居以外に、原山勝負などの地域行事にはかならず余興が供され、そこではさまざまなものが当時の人々の娯楽として楽しまれていたのであった。

特に、角力や競馬は大きな人気を博していたことが記事からうかがえ、ここで挙げた事例以外にも余興として行われた記事が散見される。しかも、力士の出身地は首里・那覇だけでなく、島尻、中頭、国頭と記事の中に見ることができるので全体的に角力の人気が高かったことがうかがえる。だが、これほど人気のあった角力が現在ほとんど行われなくなったのは悲しいことである。また、角力と空手、角力と競馬、空手と剣舞など、同じ催事に余興として供されるものもあり、当時の余興の番組の組み方には緩やかな決まりがあったようであることがうかがえた。それから、角力・空手は余興で無料で開催される場合と、客からの飛び入り大歓迎で有名力士を集め、興行として行われた例も数件見られた。これは今回とりあげた娯楽の中では珍しいものである。

また、当時の人々は新しい物に対しても興味が高かったことが、幻灯機の事例からうかがえた。当時は電気が普及し始めた頃である。ランプの明かりを使つて、異国の風景や様々な情報を写真とともに説明を加えることだけでも珍しいことであつた。やってくる観客も現在の私たちが想像するよりも多く、このことから、幻灯機（そのものと上映されるもの）に対して人々の関心が高かったことがうかがえ、記事の中には幻灯機の人気を利用して布教活動に使用している事例も見られた。

それから余興としての運動会があつたことが記事から明らかにになった。運動会の形態も、学校であれば現在の全員参加というものではなく、選ばれた者だけが出場できるといったもので、現在私たちが楽しみに観戦している世界大会のような代表選手の大会と似ていることがわかつた。さらには学校行事ではなく、秋期原山勝負の余興として青年会の会員たちによる運動会が開かれた事例では、現在の運動会をメインの催事として行う感覚と催事の余興として行

われている事例が見られたのは興味深い。

今回取り上げなかったが、その他に娯楽として行われていたものの中に「三線会」なるものがあり、三味線会が一九〇〇年一〇月七日那覇首里で流行していることが報じられ、それが糸満でも近日行われる旨が報じられる。<sup>60</sup>その後は一九〇二年の三月一九日に辻の遊郭において三味線会が催されることが報じられる。<sup>60</sup>その後、一九〇九年一〇月二一日の記事には首里で三味線会が行われた旨が報じられる。<sup>61</sup>この記事は三味線会の聴くマナーを論じたもので、どのような人物が参加した、または歌ったのか、ということは記されていない。一九一〇年三月には那覇区の城間氏の別邸で野村流の三線大会が催される。<sup>62</sup>この時は三線に桑江翁（桑江良真）を初めとして一五名、「琴三丁に笛胡弓」を合わせて、四一節を一回に分けて演奏された。後日、新聞に掲載された論評では「午後四時より十二時に至るの長時間四十二節を演奏し了るまで宛も電気に触れたるか如く我を忘れて聞きとれたり」と評されている。<sup>63</sup>演奏された節の数が記事と論評とで一節誤差があるが、どちらが正しかったかは不明である。この「三線会」は其の娯楽に比べて開催が少なく、一九一〇年の事例では私邸で開催されているが、それ以降は劇場で「音楽大会」と銘打って木戸賃を設けて開催される。この「三線会」という娯楽は、はじめは数人、私邸などで無料で楽しんでいた娯楽が、人気が高まり、興行化した例と言えるだろう。

明治・大正期の新聞記事を見てきてわかることは、大正にはいった頃からは活動写真も沖縄に入ってくる。それに押されて、他の余興の記事が紙面から少なくなっている。<sup>64</sup>また、「戦意高揚」の時代なのか、新聞記事には角力や空手など勇壮なものだけを余興に取り入れるように、といった記事も見受けられる。今後は組踊・琉球舞踊・沖縄芝居などととも、今回の娯楽を合わせて明治・大正期の娯楽文化を概観したい。

## 執筆後記

今回の論文は、波照間永吉先生の仕事のお手伝いをさせていただいた『琉球琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』に関わるものを論文にしたい、ということと執筆させていただいた。当時、膨大なデータを扱う仕事に慣れていないのと、

自分の力不足で先生や研究仲間の手をかなり煩わせたことが昨日のように思われる。苦しんだ分、書籍ができたときの気持ちは最高のものであった。先生や仲間と共に研究できたことを誇りに思い、また、これからご指導・ご鞭撻を賜りながら精進していきたい。

## 注

1. 『琉球琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』一二二頁。
2. 『琉球琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』一二四頁。
3. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』五九八頁。
4. 『沖縄市史 第八卷 上』一八九頁。
5. 『沖縄市史 第八卷 上』四四六頁。
6. 『沖縄市史 第八卷 上』五三一頁。
7. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』一五五頁。
8. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』二四〇頁。
9. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』四六一頁。
10. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』八六五頁。
11. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』六〇二頁。
12. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』六〇五頁。
13. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』六一四頁。
14. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』六一六頁。
15. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』六五〇頁。
16. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』六六五頁。
17. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』六九八頁。
18. 『沖縄市史 第八卷 上』二二四頁。
19. 『沖縄大百科事典』『原山勝負』の項。
20. 『沖縄市史 第八卷 下』五〇四頁。

- 21 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球～近代編）』六〇二頁。
- 22 『沖縄大百科事典』『競馬』の項。
- 23 琉球新報二〇一三年三月三日の記事より。
- 24 『沖縄市史 第八卷 上』一七四頁。
- 25 『沖縄市史 第八卷 上』二〇一・二〇八頁。
- 26 美里村役所『美里村史』一九六二年。七九頁。
- 27 『沖縄大百科事典』『仲原馬場』の項。
- 28 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球～近代編）』二四六頁。
- 29 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球～近代編）』四〇二頁。
- 30 近代における空手の普及・発展については、盧姜威氏の『近代沖縄 “空手” の普及発展』（『沖縄芸術の科学』第三号）に詳しい。
- 31 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球～近代編）』二〇八頁。
- 32 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球～近代編）』二〇九頁。
- 33 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球～近代編）』二一四頁。
- 34 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球～近代編）』二二一頁。
- 35 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球～近代編）』二五四頁。
- 36 『沖縄市史 第八卷 上』五二二頁。
- 37 『沖縄市史 第八卷 上』六〇一頁。
- 38 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球～近代編）』三六八頁。
- 39 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球～近代編）』三七〇頁。
- 40 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球～近代編）』三九七頁。
- 41 『沖縄市史 第八卷 下』二〇九頁。
- 42 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球～近代編）』六六三頁。
- 43 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球～近代編）』七一九頁。
- 44 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球～近代編）』二一四頁。
- 45 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球～近代編）』三〇五頁。
- 46 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球～近代編）』六六〇頁。
- 47 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球～近代編）』二五〇頁。

48. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』二四五頁。
49. 『沖縄市史 第八卷 上』四六五頁。
50. 『沖縄市史 第八卷 上』五五二頁。
51. 美里自治会編『美里誌』一九九三年。二〇九頁。
52. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』一一九頁。
53. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』一一九～一二〇頁。
54. 一八八九年二月一日、南陽館で、キリスト教会主催の幻燈会が行われ、幻燈の後に宣教師の演説が行われている。また、真教寺でも「孝子会」なるものが幻燈のあとに演説を行ったことが同年二月一七日と一九〇〇年一月一六日に報じられている。さらに一九〇一年二月一日には、久米にあった聖公会で「キリストの十架幻燈会」が催されると報じられている。聖公会では一九〇二年の二月五日にも幻燈会を催す旨を報じている。『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』一二三頁・一四〇頁。
55. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』一四一頁。
56. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』一五〇頁。
57. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』一五四頁。
58. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』一九一頁。
59. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』一三三頁。
60. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』一四二頁。
61. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』二六一頁。
62. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』二九〇頁。
63. 『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』二九一頁。
64. 活動写真については、一九二二年一月二九日に南陽館で沖縄教育会が試演会を行った記事が報じられ（『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球・近代編）』四八五頁）、次いで一九一三年一月には女子小学校を会場にして、首里教育部の主催の活動写真が二日間上演され、人気を博す（前掲書五〇〇頁）。四月には当蔵の市場で慈善活動写真が四日間行われ（前掲書五一二頁）、五月には「大田活動写真隊」なる団体が安里で活動写真の興行を行っている琴が報じられ（前掲書五一六頁）、活動写真は芝居小屋でも興行されるようになっていく。